老舎と老舎研究

夏　　宇　継

老舎（本名舒慶春，字は舎予，満州族，1899年～1966年），この名前を，中国の文学界で知らぬ者はいない。

彼は数十年の作家人生においてつねに謹厳実直であり，さまざまな題材やスタイルの作品は約1,000万字にものぼり，早くから作品の多さでも知られていた。なかでも『離婚』，『駱駝祥子』（らくだのシアンツ），『四世同堂』，『茶館』などの優れた作品や『断魂槍』，『我这一輩子』（私の一生）などの短編，中編『月牙児』（三日月）は，20世紀の中国文学の栄光を表しており，彼が作家の「大御所」といわれ，民族文学の輝かしい旗印と称されるのも当然のことである。

老舎は中国国内でますます注目され重視されているだけでなく，彼の作品はとうの昔に国境を越えていた。そして，そのうち143の作品はすでに世界の二十数種類の言語に翻訳され，出版されている。中国の現代文学作品の中で，国外で翻訳された数から言うと，老舎の作品は常に上位にあった。東洋，西洋を問わず，多くの真の有識者は，老舎の作品を，中国を知り，中国文化の奥深さを認識し，中国語の魅力を理解するための必読書と考え，大学から中学まで，さまざまな学校で中国語や中国文学を教える際の教材として選定している。

老舎研究の歴史は平坦な道ではなく，すでに七十余年の月日を経ているが，一定の規模の，かなり自覚的な研究が始まったのは，1970年代末から80年代

初めのことであり，特に中国老舎研究会が正式に発足してからである。この20年ほどの間に，すでに7回の全国規模の老舎学術研究討論会が開催され，毎回，国外の学者も多数参加している。なかでも，1993年の第5回と1999年の第7回の規模が最も大きく，正式に「国際老舎学術研究討論会」と命名された。さらに，このころから，国内外から多くの老舎の未発表作品が収集され，その中には歌劇，手紙，序言の手書き草稿も含まれた。また発言の記録や関連する画像，写真も集められた。また，非常に多くの老舎研究の論文が発表され，50を下らない専門の研究書も出版され，これらの研究理論はますます強化された。これはある種の最前線ともいえ，独自の優れた見解や新しい発見や視点の論述もあった。こうして，老舎研究の陣営は急速に発展し，優れた後継者も生まれ，すでにかなりの規模と理論的素養を持っている。老舎研究は，中国国内において中国現代文学研究のうち最も発展の顕著な学術領域の1つであり，すばらしい成果を上げていると公に認められているだけでなく，世界各国の研究界とも広く呼応し，喜ぶべき情勢にある。

「人民の芸術家」老舎の生誕百年の記念日である1999年2月3日にあわせて，中国の首都，老舎の故郷である北京では，政府主催から民間まで情熱的かつ心のこもったさまざまな記念の催しが盛大に繰り広げられた。こうした催しは続いて全国に広まり，特に，この熱気の立ちこめるなか，中国第7回老舎学術研究討論会と合わせ老舎生誕百年国際老舎学術研究討論会が開催された。これは実に，老舎研究史上，みなを感激させる大きな事柄であり，こうした盛大な催しは，新世紀の曙がすでに出現しているときにあって，それまでの老舎研究をみごとに締めくくり，新しい段階へ入っていくことを宣言するものであった。

2月2日，北京市政府は北京市老舎生誕百年座談会を主催した。さらに2月3日，中華人民共和国文化部，中華全国文学芸術界聯合会，中国作家協会と北京市政府は，人民大会堂においてさらに高度なレベルの国家クラスの記念座談会を開催した。この2回の座談会の席上，国家の指導者たち，老舎の

生前の友人，老舎研究の専門家や各方面の代表者たちは，中国文化と文学の発展史上において老舎の占める重要な位置を十分に認識する発言を行った。そしてこの憂いに生き，憂いに死に，自己の人民のために生涯一生懸命ものを書き続け，卓越した文学をうち立てた巨頭，終始自分の民族と喜びと悲しみを共にした偉大な愛国者，中国の文学芸術界の名だたる指導者であった老舎に，きわめて高い評価を与えた。

老舎生誕百年を記念する日々において，北京市東城区豊富胡同19号の老舎旧居では，建物が修理されて一新し，「老舎記念館」と正式に命名され，社会の各界に開放された。人民文学出版社は，老舎生誕百年の直前，ついに記念版「老舎全集」全19巻を上等な装丁で完成させた。収録した作品は，発表された当時の初版本に基づいて内容や字句が調べられ，版本も信頼でき，編集校正もきちんと行われた。この全集は，今までで老舎の作品を最も完全に収録した，最も権威ある版本と言うことができる。

老舎生誕百年を記念する催しのなかで，中国の大陸と台湾，日本，韓国，シンガポール，アメリカ，ドイツ，フランス，ロシア，スロバキアなど10の国や地方から100人を超える老舎研究の専門家が，老舎の故郷北京に集まってきた。彼らは'99老舎生誕百年記念の国際学術研究討論会に参加するために来たのであり，それぞれの学術的成果を持って老舎にお祝いを述べに来たのである[1)]。

私が最初に老舎研究に接したのは，仕事の関係からであった。1986年に中国第3回老舎学術研究討論会が北京で開催されたのだが，その時，中国の民族文学理論方面で最も権威ある刊行物『民族文学研究』（中国社会科学院少数民族文学研究所の編集）に老舎研究に関する論文を掲載することになり，その論文の一部の審査，編集を任されることになった。それからのち，夫が老舎と同じ満州族だったからなのか，それとも友人である関紀新（老舎研究の権威，中国老舎研究会秘書長，1998年に40万字にのぼる老舎研究の力作『老舎評伝』を出版した）の影響だったのか，私にもよくわからないが，す

ぐに老舎に夢中になってしまった。そして中国にいたときも，日本に来てからもずっと，老舎の研究に関わってきた。

老舎は時代のために，そして世界のために，あのように世にもまれな優れた作品を捧げてきたと同時に，大家の風貌と才能を持つ一連の芸術の法則を提示しているのは確かである。

① 彼の作品は，民族全体の昔から今までの文化の生命に終始注目し，民族文化の生命のもとを分析し，彼自身の一連の文化学を含んでいる。

② 彼の作品は，とても味わい深い燕京百態図一枚一枚を描き出し，人格を習俗化し，習俗を人格化して表し，彼自身の一連の小説学を含んでいる。

③ 彼の作品は，北京特有の味わい深い言葉と，本来の自然の知恵を見え隠れさせた老舎式のユーモアをもって，詩情あふれた魅力を漂わせ，彼自身の一連の言語学を含んでいる。[2)]

しかるに，老舎の作品のうち最も深い印象を受けたのは，中国の民衆が苦難にあったり，素朴で善良であることの多くの表現であったと同時に，少しの遠慮もなく彼らの別の一面を描いていることである。その表現は私たちの予想外であり，普通一般のものとは異なるが，非常に真実をついていて，それゆえに人々を憂慮させ，深く考え込ませる。

老舎は『我这一輩子』の中で軍隊の反乱を描いているが，驚き動転させられるのは，兵隊たちが行ってしまったあと，普通の人々が街に出て略奪を行う場面を描いている，このことの非凡さである。

> 通りには，炎の明かりと人影だけで，巡査は見当たりません。しかも，兵隊たちに押し入られた質屋や装身具店はどれも開けっ放しになったままでした。……こんな街の姿を見ると，人間は恐ろしい気がするものですが，同時に大胆にもなるものです。巡査のいない街は，ちょうど先生のいない教室と同じようなもので，どんな真面目な生徒だって騒ぎ立ててやろうとするでしょう。

一軒が戸を開けると，どこの家でも戸を開け，通りに出てきた人びとは後について略奪する。しなければ，しない者が損をするのだ。

普通の時だったら，法を守る善良な人たちに強盗みたいな真似ができるなんて考えられるでしょうか。そうなんです。機会到来と見るや，すぐにも人間は本性を現すものなのです。

男たちが略奪に行って戻ってくると，次からはもう女も子供も混じっている。貧乏人はもちろんのこと，そうでない連中も後れをとらない。兵隊に押し入られなかった商店の門も，人びとが侵入してくるのを防ぎ止めることはできない，どこの店の扉も，同じようにつき破られる。もうなんでもよいのだ。

みんなの眼は血走っている。だれもが死にもの狂いだった。

背負い，抱え，担ぎ，引きずる。まるで，戦いに勝った蟻と同じだった。しかも，菜切り包丁まで持ち出し，路地の入り口で待ち受け，「おいてけ！」とやる者までいる。

他の作家が，こんな描き方をしたのを本当に見たことがない。数多くの作品の中で，大衆は人に屠殺されるがままの牛や羊である，善良であるがゆえに。大衆は，また魯迅の筆によれば傍観者である，彼らの愚昧さのゆえに。また大衆は革命性を持つがゆえに，反抗闘争を描く作家も多い。だが老舎がここで描いたのは，人間の本性の中に潜んでいる野獣性であり，人は「野獣の中から出てきた」という。すなわち，いつもは非常におとなしいが，一旦適当な土壌，雰囲気が与えられ，彼らをおだて惑わすに足る思想的な煽動があると，長年にわたる礼儀作法や教えがあったとしても，仁義も博愛も慈悲も心の奥で冬ごもりをしていたあの鬼をおさえきれるものではなく，一瞬のうちに「本性を現す」。人は悪獣に変われるのだ。

魯迅が傍観者を描いて憂えたのは，中国人の無感動無感覚である。老舎が暴徒を描いて憂慮したのは，中国人の盲従して悪事を働くところである。この両者はいずれも，広大で悠久の歴史を持つものの絶えず動乱にみまわれてきた中国の大地において，相前後して発せられた警醒の声である。

老舎のこの憂慮は長期にわたった。時に見え隠れしながら，生涯ついてまわったと言ってもよい。早くも『趙子曰』(1928) の中に，おそろしい学校騒動が登場する。正門が壊れ，窓の戸がすっ飛んでいる。校長は縛られてなぐられ，かもいには耳が釘付けにされていた——庶務係のだった。だが，学生は悪人ではないはずだ。『大悲寺外』では，黄先生が学校騒動で死んだが，学生は必ずしもみな彼を恨んでいたわけではない。『猫城記』(猫の国) の猫人は，皇帝を殺しただけでなく，家長を殺し，教師も殺した。

「無感動無感覚」にせよ「盲従して悪事を働く」にせよ，その実，彼らには決して悪の基準がないわけではなく，自分の好みによる選択がないわけでもない。老舎は言っている，「世の中には確かにこうした人が多いのです」，「彼らは別に物事の善し悪しが分からない訳じゃなくて，彼らが大事に思っているのは自分だけなんです」，だから恐ろしいことに，「たちまち人になったり，たちまち野獣になったり」するのだ。

老舎の憂慮は数十年ののち，不幸にもやはり自分の頭の上に降りかかった。千にも万にものぼるかわいい子供たちが，一夜にして狂った。彼らは赤い腕章をつけ，皮ベルトを振り回し，校長をうち，教師を殺し，昨日まで彼らが熱愛していた人民の芸術家を殺した。どうしたんだ？　なぜ，こんなことに？　太平湖のほとりで，深夜，老舎の心の中には再度この永遠の憂いがわき上がってきたに違いない，理性の呼び声も，もういらなくなってしまった。

老舎は『我这一輩子』の中で，次のように言っている。

> これ以上あれこれあげつらう必要もないでしょう。私どもの国の人間がどんなことになってしまったか，大体どなただってはっきり見ることができたでしょうから。

しかし，それは「私どもの国の人間」に限ったことではない。彼が提起したのは，国民性の問題のみならず，人類全体の本性の問題である。中国人は確かに文化水準が高くない，それじゃ外国人はどうか？　礼の国の日本が，どうして全力を挙げて隣国に出かけていって強姦や殺戮を繰り広げたのか。

彼ら一人ひとりが自覚した軍国主義者だったのか。ゲーテやベートーベンの子孫が，どうして「ヒットラー万歳」と狂ったように叫びながらヨーロッパ中を殺戮して回ったのだろう。彼らだってすべてがファシストには見えない。老舎の憂いは民族の憂いであり，人類の憂いでもある。この憂うべき憂いを，今はすでに過去のものとなったなどと，いったい誰が言えようか。平凡な大衆は，良い時には本当に良い。だが，突然悪くなると，まったく恐ろしいほど悪くなる。とりわけ，ある人たちに彼らの目的を達するために利用された時には。[3)]

私は，ある文章を思い出さずにはいられなかった。それは，中国文化大革命30周年の1996年５月に，友人を偲んで私が書いたものだ。当時，私はただこう書いただけだった，「……私の母校である清華大学付属中学，高校こそ，あの計り知れぬ変化を遂げた文化大革命の中で特殊な役割を果たした紅衛兵組織の誕生の地だった。わたしは，このかなり特別な場所で起こったひとつの本当の話を，みなに知ってほしい。このようなことに遭遇したこと，むごたらしいめにあった人のことを，永遠に忘れ去っていないのなら，このような歴史の大きな後退を二度と起こしてはならないと思う[4)]」と。しかし，現在の私の意識は変わっている。ただ忘れないだけでは，二度と歴史を大きく後退させないというには不十分だ。総括して教訓を学び取り，反省することが必要だ。しかも，こうした反省は，ある範囲に限ることなく，全人民に広げるべきである。なぜなら，ある意味では，「我々はみな原罪を負っている。我々はみな過去の日を悟って心を改めねばならず，これも，あの時代が我々と我々ののちの人びとに残した最も深い教訓なのかもしれない！[5)]」

もちろん，権力者や政策決定者としては，その担うべき責任は普通の人々とは本質的に異なる。なぜなら，結局のところ，人々の心の中の「天使」の一面を引き出し，育てるのか，それとも「悪魔」の一面をそそのかし，異常にふくらませてから放たせ，「羊」を「狼」に変えさせようとするのか，これは往々にして彼らが採った政策や方向によって直接決定される。いっさい

の善良さを丸飲みした「文化革命」の中で，当局の採ったあの「陰で」摘発し，「密告」を奨励するという卑劣なやり方は，この悪辣な方法を初めに制定した当局者とともに，歴史の恥辱の柱の上に永遠に釘づけにされるべきである。

1966年8月24日，文化大革命はきわめて険悪な政治情勢になっていた。うわべは無定見のようでも心の中にしっかりとして見解を持っていた老舎は，前日批判闘争で大いなる恥辱を受けた。夜になってから，彼は二度と崇高な頭を下げないことを命にかけて決心した。彼はゆったりと落ち着いて選んだ場所——北京豁口西北の太平湖で，母親が亡くなった旧居に近い小さな公園で，やはり自分がゆったりと落ち着いて選んだ方法で湖に身を投げた。生涯の精力と忠誠心をもって無条件に祖国の命運を心にかけ，億，万大衆の暮らしと精神をいとおしんだ「人民の芸術家」は，こうしてひそかに去っていった。「我々民族のこの本物の黄金が砕かれてしまった。」[6)]

老舎は死をもって，久しぶりの尊厳と静かな落ち着きを取り戻し，ついには死者のために自ら文化人戦士と人類の良友という神聖で純潔な形象を鋳造した。もちろん，それと同時に，人びとに残した思索と思慕の情も重く，永遠のものであったろう……。

老舎の悲劇は，20世紀の中国の知識人すべての悲劇的運命の縮図と言うべきである。老舎の訃報を聞いた周総理は，地団駄踏んで「老舎先生をここまで追いつめてしまったとは，私はいったい国際社会にどう説明すればよいのだ」と言ったという。

老舎が亡くなったという知らせに驚いた井上靖，水上勉，開高健，有吉佐和子，城山三郎などの日本の作家たちは，続々と文章を著し，粛然として尊敬の念を起こさせるこの中国人作家の霊を深い悲しみをもって弔った。しかし，このニュースは，文革の期間中ずっと，中国政府側マスコミからは伝えられなかった。巴金は「日本の友人たちと日本の作家たちは，老舎同志の悲劇的な死を，我々よりもずっと重視している。彼らは，この巨大な損失を，

我々よりずっと痛惜しているようだ」と指摘している。[7)]

1978年6月3日になって，鄧小平が直接所管したことにより，老舎の冤罪はやっとそそがれ，名誉回復した。北京で老舎の「納骨式」が挙行されたが，残念なことに彼の遺骨は保存されていなかった。空の骨壷の中に入れられたのは，彼が愛用した眼鏡，万年筆と毛筆，そして彼が好きだったジャスミン茶からすくい取られた，すがすがしい香りがほのかに漂うジャスミンの花だけだった。

老舎は，1965年に中国作家代表団を率いて一度日本を訪れただけだったが，日本の人びとに心より歓迎された。「日本において，老舎の名はすでに日中戦争時代より広く知られ，中華人民共和国成立後には第一次老舎ブームを迎え，以来今日まで魯迅と共に長く読み継がれている。[8)]」

日本老舎研究会は，1984年3月17日に成立し，1998年までに青年から年配の者まで105名の学者が集まっている。この研究会は，中国本土の研究会を除いて，国別では最も規模の大きな会であり，毎年7月下旬に年会を開くことになっている。

老舎の著作の翻訳では，世界で日本が最も早い。翻訳された著作数も，日本が最も多く，なかでも長編小説の翻訳は日本が最も完全に揃っている。『駱駝祥子』の訳本も，日本が最も種類が多い。老舎研究の数においても，日本は上位である。多くの日本の学者は，人びとを熟慮させる多くの明敏な観察と新鮮な観点を提起している。日本の学者が編纂した老舎の年譜は，種類が多いだけでなく，内容も非常に詳細である。国外で上演された老舎の演劇は，日本が最も多い。老舎の著作の注釈は，日本が最も優れている。日本の老舎研究者と愛読者は，中国を訪れる回数も最も多く，実地の考察も熱心かつ細かく，他の国の研究者たちからも推賞を得，賞賛されている。得難く貴いことは，日本の若い老舎研究者の人材が輩出し，頗る造詣が深く……など，これらのことはみな，世界で初の老舎研究の学術団体がちょうど日本に出現したのも決して偶然で

はないことを説明している。[9)]

日本でかなり影響力のある老舎研究家としては，故柴垣芳太郎（日本老舎研究会初代代表委員[10)]）のほか，藤井栄三郎（同第二代代表委員），杉本達夫（同第三代，現代表委員），伊藤敬一，日下恒夫，中山時子，平松圭子，倉橋幸彦などがおり，そのほとんどが大学の教授である。

しかも，以上に述べたように，日本には多くの老舎の忠実な愛読者や老舎の心酔者がいて，彼らは必ずしも老舎研究会の会員ではないのだが，老舎の旧居を修復するために1,000万円を寄付するなど，老舎を記念する活動に熱心に参加し，人に知られないところで老舎研究に貢献している。

例を挙げると，1983年秋，『茶館』を日本で上演したとき，これらの人びとは一般のマスコミに比べより直接的に，そしてより深く宣伝活動を行い，さらに多くの日本人に老舎を知らせ，理解させ，日本における老舎ブームをさらに盛り上げた。また，『老舎ユーモア詩文集』の日本語訳が1999年11月に出版されたが，この本は50人近い中国語学習者や老舎の愛読者たちが何年もの努力の結果完成させたものである。私の親しい友人数人も翻訳に参加していたが，彼らが私に問い合わせをしてきた時の真剣な態度を思い出すたびに，いつも温かい思いが内心よりわき上がるのを感じる。彼らこそが，日本老舎研究会の広範な社会的基礎を作り上げたのであり，各国に彼らのような人びとがいるからこそ，老舎を数十年来絶えず世界に向けて着実に歩ませているのだと，私は痛切に感じる。

もとより，老舎も彼の文豪としての身分に似つかわしくない政治的風潮を追うような作品を残している。このこと自体も，老舎の悲劇の一端である。しかし，中国現代文学の発展と浮沈の中で，茅盾，郭沫若，曹禺など解放後残すべき佳作のない多くの作家たちと違い，老舎は解放後も依然として『茶館』のような優れた作品を含む多くの影響力ある創作を行った。それゆえ，老舎の歴史的意義は，私たちにとってさらに深く考え，総括する価値を持つ。私は，老舎研究の領域が絶えず広がり，老舎学のレベルが絶えず向上するこ

とを心より希望している，中国において，日本において，また世界各国においても……。

注

1) 関紀新「北京老舎生誕百年記念活動概況」を参照。『新華僑』『新華僑』雑誌出版，1999年3月号，19-20頁。
2) 楊義「老舎と二十世紀中国文学」を参照。『民族文学研究』中国社会科学院少数民族文学研究所，1999年第4期，47-48頁。
3) 范亦豪，曽広燦「老舎の創作の哲理が含むものを語る」を参照。'99国際老舎学術研究討論会論文選『老舎と二十世紀』中国天津人民出版社，43-44頁。
4) 夏宇継「永遠に正式党員になれないひとりの予備党員」『留学生新聞』（日本発行）1996年5月15日，第19版。
5) 鄭義「清華大学付属中学，紅衛兵と私」『北京の春』1996年11月号，34頁。
6) 王之行「老舎を論ずる」『文芸報』1989年1月21日。
7) 巴金『随想録』。
8) 柴垣芳太郎「老舎研究会の発足に当たって」『老舎研究会会報』第1号。
9) 胡絜青「日本老舎研究会成立大会への祝辞」『老舎研究会会報』第1号。
10) 代表委員は会長に当たる。